

60374

教科書文庫

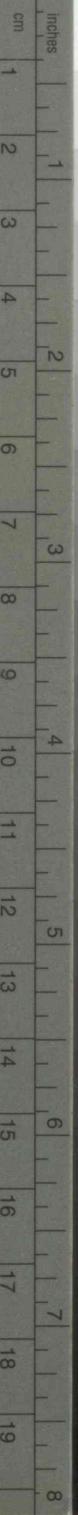
6
810
45-1949
01304
49675

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

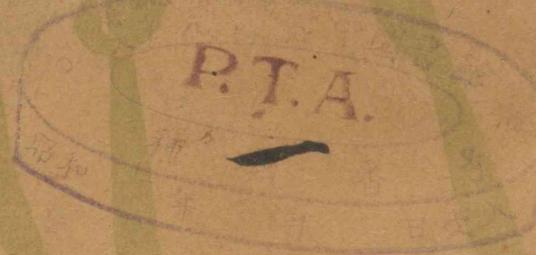
© Kodak, 2007 TM: Kodak

文部省

(1)

文部省著作教科書

中等國語



0 1 2 3 4 5
1m 6 7 8 9 10
JAPAN TAKUMA

中央図書館



食事

ミレー作

広島大学図書

0130449675



中等國語

文部省



(1)

目 次

○一 第一步	一
○二 世界をつなぐもの	四
○三 雨にもまげず	十二
○四 おはよう	十四
○五 昆虫記	十八
○六 潮 目	二十四
○七 日記から	二七八
○八 初夏の奈良	三十一
○九 りすを育てる	三十三
○十 末廣がり	四十九
○十一 涼み台	五十六
付録 作者の略傳	六十六
当用漢字別表	七十一

、学習の手引について

各課のあとに掲げた手引は、各課の教材を学習するに当たり、どんなことをしたらいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、さらに理解を発表する話したいもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してある。
しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい学習を進展させていくてほしい。

一 第一步

この「よびかけ」の演出は、みんなでくふうしよう。

「新しい道、」

「明かるい光にみちた道、」

「希望にみちた、楽しい出発。」

「楽しい出発。」

「私たちは、その第一歩をふみ出そうとしている。」
「さ、自分の進む道を力強くふみ出そう。」

「ふみ出そう。」

「道ばたの名もない草を、時には、ながめ、」

「途中で弱った友だちがいたら、手をとりあって、」
「川があれば、橋をかけ、」

「夜道になれば、ひをかゝげ、」

「みんないたわりあって、」

「みんな、楽しく、」

一 第一步

「自分の選んだ道をふみ出そう。」

「ふみ出そう。」

「あ、希望は、めい／＼の胸に、」

「ほの／＼のように燃えあがる。」

「——燃えあがる。」

「雲のようにひろがる。」

「——ひろがる。」

「さあ、出かけよう。」

「足なみそろえて。」

「もしも、——」

「あらしがおそつて來たら、」

「もしも、——」

「難路にさしかゝつたら、」

「その時は、」

「みんな呼びあつて、」

「励ましあつて、」

「そうだ、愛をもつて、」

「ほんとうの愛をもつて、」

「つきぬいて進もう。」

「きりぬけて進もう。」

「さあ、出かけよう。」

「足なみそろえて、」

「若々しい人生行路、」

「おごそかな第一步、」

「第一步。」

学習の手引

(1) この「第一步」はなんの第一步か、この道はどんな道であるか考えてみる。

(2) 第一步をふみ出そうとする作者の心持について話しあう。

(3) 何人でやつたらいいか、どう演出したらいいか、共同研究する。できればについて話しあう。

(4) この内容を詩に書きなおしたり、普通の文に書きなおしたりする。

(5) たとえば、「入学」「わが学校」「春」というような題で「よびかけ」を自作自演してみる。

二 世界をつなぐもの

少年赤十字

「平和の光うらゝかに、廣き世界を照らしつゝ、輝く日にもたゞふべき、厚き恵みと博愛の、情いや
ますわがつどひ、これぞ少年赤十字。」

私たちはこの歌をうたいながら、團員としての務を果たしています。

務の第一は、だれでも愛するということです。お互に尊敬しあい、自分が苦しんでも、ほかの人を
助けてやることです。自分がさせいになることすら覺悟しなければなりません。

その第二は、健康を保つばかりでなく、これを増すことであります。いくら、いいことをしようと思つても、からだが弱くては、何事もできるものではありません。からだをじょうぶにしておいて、いざという時に、じゅうぶん働けるように心がけています。毎日の生活を規則正しくするのも、衛生に注意するのも、この念願にほかなりません。

第三は、海外の少年少女となかよくすることであります。今や世界は、全く平和になりました。ことに日本は、戦争というものを永久に引き起さないということをきめました。こうなりますと、いよいよ國際親善の道が開かれなければなりません。それで、私たちは一日も早く國際的教養を身につけることがたいせつです。この三つの務を果たすために、團員たちはいろいろな行事を考えています。毎年春になりますと、小鳥の巣をこしらえて、これを林や森に持つて行つて、幹や枝などに備えつけでやります。小鳥たちは、いつのまにかこの中に巣を作つて、卵を産み、ひなをかえし、親子をろつて住みつくのです。これも行事の一つです。

あちこちの國から、花の種を送つてもらつたこともあります。そして、それをまいて、花園を作りました。種はみんな芽を出し、花を咲かせました。世界じゅうのなかまの美しい心が咲きそろつたよう、花園はりっぱでした。

その後日本の花の種も、方々の國々に送り届けました。その種も世界のあちこちの土地で、花を咲かせました。これも美しい仕事でした。

それからまた、國際通信交換をします。これによつて、お互の國のことを知りあうばかりでなく、見知らぬ國の少年少女たちと親しみあうようになります。いわば國境を越えた奉仕の心が、大きな行事ともなっています。

「平和の光うらゝかに、廣き世界を照らしつゝ、輝く日にもたゞふべき、厚き恵みと博愛の、情いや
ますわがつどひ、これぞ少年赤十字。」

私たちはこの歌に生き、この歌を生かそうと、その日その日の仕事を果たしています。

國際語

ヨーロッパ大陸の中央を東から西北へ貫ぬくカルパチア山脈の北に、バルト海へ注ぐヴィスツラ川をはさんで、はてしなくひろがる緑の平野がある。

十世紀のころ、この豊かな土地に、ポーランド人が王國を建てた。それからおよそ一千年、この國

は幾たびか榮え、幾たびか衰えたが、その浮き沈みにつれて、幾つもの民族が、こゝにあちあつた。十八世紀の末、王國が滅んで、その領土がロシア・プロシア・オーストリアの三國に分割されたころには、ポーランド人のほかに、リトワニア人・ユダヤ人・ロシア人・ウクライナ人・トルコ人などが、國じゅうの町や村に入り交つて住んでいた。

これらの民族はそれ／＼顔つきが違つてゐるばかりでなく、ことばも、宗教も、風俗や習慣も異なつていた。

こうした國に、感じやすい心の持ち主が生まれたならば、どういうことになるであろうか。

一八五九年の暮れ近く、ビアリストク市に生まれたルドヴィコ・ザメンホフは、そうした人物のひとりであった。

ビアリストク市はロシア領にあつて、こゝに、ポーランド人の地主、ドイツ人の技術者、ユダヤ人の商人などが古くから住んでおり、それをロシア人の役人が治めていた。

心やさしい母に育てられ、人間はみな兄弟であると教えられたザメンホフの胸の中には、早くから人類に対する愛情がめざめ、はぐくまれていた。

けれども、日ごとにかれが町で出会う人々とは、人間といふ兄弟どうしではなかつた。ポーランド人・ロシア人・ドイツ人・ユダヤ人といふ他人どうしにすぎなかつた。しかも、互になかのわるい他人であつた。

はげしい争いも絶えなかつた。事の起りは、いつもつまらぬきつかけからであつた。たとえば、市場の人ごみの中でドイツ人がポーランド人につきあたる。それだけのことから、ごた／＼が始まり、しまいには、みなりのまち／＼な人々が入り乱れて、互にわからぬことばでわめきながら、打つ、けりのさわぎにもなる。

そうしたありさまを見るたびに、ザメンホフの心は痛んだ。しかし、かれの心は痛むだけにはとゞまらなかつた。幼いながら、そうしたできごとのほんとうの原因をつきとめようとした。さらに、そのつきとめた原因を取り除きたいと考えるにいたつた。

同じ町に住む人たちのなかがいの原因是、つきつめれば、風俗や習慣が異なり、ことばや宗教が違うところにあるのではないか。こゝに氣づいたザメンホフの頭の中には、やがてこの原因を取り除くふうが、あれこれと浮かんで來た。おとなになつたら、これらの計画を実現させよう。

けれども、年をとるにしたがつて、いろ／＼の夢は次々に消えて行つた、たゞ一つを残して。たゞ一つ、それだけは心の底にこびりついて、いつまでも離れなかつた。それは人類共通のことばについてであった。

ことばのまち／＼なことが、何よりも大きな、外國人どうしの憎しみの原因なのだ。ザメンホフはそう考えた。このことばの違いをなくさなければならない。人類に共通のことばがあつたなら。ポーランド人にも、ロシア人にも、ユダヤ人にも、ドイツ人にも、だれにもわかることばさえあつたなら。そうした人類共通のことばの使われる時代が來たならば、地球の上に、人間はだれもが互に理解しあうことができ、民族と民族との間のわだかまりも溶けうせて、世界は平和になるに違いない。そうだ、こればかりは実現しなければならない。

中学校にはいると、ザメンホフはいろいろなことばを熱心に勉強した。そのあげく、かれは、どの

民族に対しても公平であり、だれにも学びやすいことばを自分で作りあげようと思いたつた。

学校での成績はいつも一番であったが、勉強のかたわら、共通語を作る仕事を続けた。その仕事は、一八七八年、中学校生活最後の学年にひとまず完成した。この年十二月五日、ザメンホフ家に数人の中学生が集まつて新しいことばの誕生を祝い、このことばで作った歌をうたつた。

民族の間の憎しみは、

たおれよ、たおれよ、時は來た。

人類はみな心を合わせ

一つ家族にならねばならぬ。

そののち、いろいろのいきさつがあつたが、ザメンホフは、自分の作ったことばを絶えずみがきあげ、ついに一八八七年七月、これに「國際語」という名まえをつけて、世界に発表した。これが、のちにエスペラントと呼ばれるようになつたことばである。

こののち、ザメンホフは、一九一七年ワルシャワでなくなるまでの一生を、この人類共通語としてかれの作ったことばのためにさゝげた。

ノーベル賞

先日の新聞に、一九四六年度のノーベル賞の文学賞が、ドイツの詩人、ヘルマン・ヘッセという人におくられたと報ぜられていました。そうして、このノーベル賞は、その年に、人類の文化や世界の平和のため、いちばん大きな功績を残した人におくられる、最も名誉ある賞だと説明してありました。

ノーベル賞のことは、前から聞いていたのですが、どんなものであるかということは、よく知りませんでした。この機会にできるだけ調べておきたいと思って、いろいろの本を読んでみました。

ノーベル賞といふのは、スウェーデンのアルフレッド・ノーベルといふ科学者の遺言によつてできたもので、物理賞、化学賞、生理学および医学賞、文学賞、平和賞の五つに分かれています。そして、その年に、科学の上で重要な発明や発見をしたり、すぐれた文学作品を書いたり、國際間の親善に盡くし、世界平和のために骨折つたりした人々におくられるのです。ノーベルがスウェーデン人であるから、スウェーデン人にだけ與えられるというのではなくて、どこの國の人であつても、その人のしたうつぱな仕事に対する與えられる光榮あるしるしです。これをもらつた人は、世界的に偉大な人といふ折り紙をつけられたことになります。

一九〇一年に第一回の授賞が行われてから今日まで、すでに二百名以上の人人が授賞せられています。その中には、X線を発明したレントゲンとか、ラジウムを発見したキューリー夫人とか、あるいは、「青い鳥」を書いたメーテルリンクなどの名があります。

それでは、このノーベル賞を生んだノーベルとはどんな人であつたでしょう。

ノーベルはスウェーデンに生まれた科学者で、今から五十年前に六十三歳でなくなっています。ダイナマイトを発明し、それを製造する会社を、世界の各國につくつて經營しましたので、世界の火薬王と呼ばれていました。

ダイナマイトは、その強力な爆发力を利用して岩石をくだいて、トンネルを掘つたり、運河を開いたり、鉱山で鉱石を探掘したりする時に使われます。ダイナマイトの発明のおかげで、土木事業や、

地下資源の開発が、どんなに多くの利益を得たことでしょう。

ところが、それが兵器として使われるようになり、そのため多くの人命が失われ、文化が破壊される結果となりました。これは、おそらくノーベルの願っていたところではありますまい。

ノーベルは生まれつきやさしい人で、父母や兄弟に対してもいつも心から忠実でした。外國に出ていそがしい仕事に従事している時でも、母の誕生日には、わざ／＼老母のもとに帰つてお祝いするのを楽しみにしていました。また、世の中の困っている人たちのために、自分の收入のすべてを與えたこともあります。

このように、世の中の人に対する慈愛の心の強かつた人ですから、自分の発明したダイナマイトが、人間の生命を奪い、文化をこわす結果になつたことをたいへん悲しみました。それで、死ぬ時、自分の財産の全部を出して、人類に大きな幸福をもたらした者に與えるようにと遺言しました。この美しい遺志によつて生まれたのが、今のノーベル賞であります。

終りに、ノーベルの人がらがわかる一つの話を書きましょう。

ノーベルがパリにいたころのことです。冬の寒いある日のこと、街頭でひとりのスウェーデンの婦人に会いました。同國人のよしみで、ふと、とりかわした一言のあいさつから、ノーベルは、その婦人がよるべのない、きのどくな身の上であることを知りました。そこで、ノーベルはその婦人のために、ある寺院の小さな雑役の仕事を見つけてやりました。この親切な行為に対し、婦人は次のような感謝の手紙をしたくめています。

「ノーベルさま。あなたは、私の一生の恩人でございます。

あなたにお目にかかるまで、私はだれからも一言の親切なことばも與えられませんでした。あの時、私は、たゞ一言、通りすがりのごあいさつを申しあげただけでございました。再び『今日は。』と申しあげる機会が來ることさえ予期していませんでした。それなのに、あなたは仕事までお與えくださいました。

助かりました。私はとびたつ思いでございます。この喜び、この感謝——これをどう申しあげたらよいでしょう。たゞ神様のみまえにひざまずくばかりでございます。」

ノーベルの机上には、このような感謝の手紙が絶えなかつたということです。

學習の手引

(1) 次の間に答える。

イ 少年赤十字團の仕事。

ロ ザメンホフはいつ、どこで生まれたか。

どうして國際語のことを考えるようになったか。

ハ 國際語はなぜ必要か。

ニ ノーベルはどんな人だったか。

ホ ノーベル賞とは何か。

(2) 少年赤十字・國際語・ノーベル賞のどれかについて、もっとくわしく調べる。調べたことを文にまとめる。

(3) 「世界をつなぐもの」ということについて、みんなで話あってみる。

三 雨にもまけず

宮沢賢治

雨にもまけず、

風にもまけず、

雪にも夏の暑さにもまけぬ、
じょうぶながらだをもち、

欲はなく、

けつして怒らず、

いつもしずかに笑っている。

一日に玄米四合と、

みそと少しの野菜をたべ、

あらゆることを、

じぶんをかんじょうに入れずに、

よくみきさしわかり、

そしてわすれず、

野原の松の林のかけの、

小さなかやぶきの小屋において、

東に病氣のこどもあれば、

行つて看病してやり、

西につかれた母あれば、

行つてその稻のたばを負い、

南に死にそうな人あれば、

行つてこわがらなくともいいと言い、

北にけんかやそしょうがあれば、

つまらないからやめろと言い、

ひでりのときはなみだを流し、

寒さの夏はおろ／＼あるき、

みんないでくのぼうとよばれ、

ほめられもせず、

くにもされず、

そういうものに、

わたしは、

なりたい。

学習の手引

- (1) 作者はどんな生活を理想としているか、まとめて自分のことばで言ってみる。
- (2) 朗読についてくふうする。
- (3) 「そういうものに、わたしはなりたい」という題で詩や短い文を作つてみる。
- (4) 自分はどんなものになりたいか、めい／＼の「理想」についてみんなで話しあう。
- (5) 宮沢賢治の作品をもつと調べる。

四 おはよう

生きたことば

西尾 実

四月はじめのある朝、私はいつものように電車からおりて、春らしい日ざしを楽しみながら、ゆっくり学校の方へ歩いて行つた。

途中、公園のさくら並木を通り越して舗装道路にさしかつたころ、ひとりの生徒が私のそばを急ぎ足で通り過ぎた。うしろ姿を見ると、まだ制服もま新しい、入学したばかりの生徒である。まもなくまた私のうしろから來た生徒が、私を追い越そうとして、「おはようございます。」とあいさつした。見ると、五年生のひとりである。すると、さきに追い越した新入生が、何を思つたか急に立ちどまり、道の左側に直立している。そして、私が近づくと脱帽して、「おはようございます。」と言ふ。私も「おはよう。」とあいさつを返した。すると、私の声の終るか終らないうちに、かれは再び語を發して、「先生、私はさつき先生だということを知りませんでした。」と言つて頭をさげた。「あゝ、そう。」と言ひながら思わず私も頭をさげた。

「先生に対し、学友に対し、必ずはつきりことばに出してあいさつせよ。」とは学校の平素の教育である。この新入生も、さつくこの教育を受けたのであろう。そして、ひとりの先生に対してその礼を欠いたと氣づいた時、直ちにその氣づいた場所に立ちどまつて待ち受け、あいさつを果たし、さきの欠礼を謝したものと見える。

考えてみると、うらやましい行動である。だれでも、自分のしたことが誤っていたと知つた時、これほどこだわりなくその非を認め、これほどはつきりとその非を改めることができたら、どんなに幸福であろうか。私は明かるくされた心持で、学校の門をはいつた。

その後も、私は時々このことを思い出す。そして、あの少年のいちずな顔と、はりきつた声とを、あり／＼と見聞くように感じるとともに、「先生だということを知りませんでした。」という、力あることばを思い返さずにはいられない。

実際、こういいうのちの底から押し出して來たようなことばには、不思議に人の心を明かるくする力がある。時に、氷のようにかたくとざした人の心をも、一瞬に溶かしやわらげるのは、こういうことばである。しかもそれは、聞く人の心を動かすだけではなく、もっと直接に、それを発した人の心を開拓し、その最も深い、最も眞実な人間性を鼓舞し、開發するものである。このように、いのちがそのまゝことばに現われ、ことばが直ちにいのちそのものであるような域にいたつて、はじめてことばが直ちに生きたことばになると見えよう。さきの新入生の場合においては、それはおそらく少年ら

しい純真さの現われであったであろう。しかし、われ／＼は話す働きを練ることによつて、こういう生きたことばをます／＼養い育てて行くことができるるのである。

國語の学習においては、論文も隨筆も小説も読まなくてはならぬ。歌も句も詩も読まなくてはならぬ。文もつゞらなくてはならぬ。しかも、それだけで、談話や問答やあいさつのような、日常のことばをちろそかにしたならば、その学習は、根のない植物を育てようとするに等しく、眞の國語力の成長を見ることはできないであろう。

われ／＼は、何よりもまず、われ／＼自身のことばを生きたことばたらしめることによつて、われわれの心をひらき、いのちを向上させなくてはならぬ。そしてそれが、文を読むことに対しても、眞の基礎であることを自覺しなくてはならぬ。

一日のはじめにおいて

山村暮鳥

見ろ、

太陽はいま世界のはてからのぼるところだ。

この朝霧のまちと家々、

この朝あけのするどい光線。

まず木々のこずえのてっぺんからして、

新鮮な意識をあたえる

みず／＼しい空よ。

からすがなき、

すゞめがなき、

ひと／＼はかつきりと目ざめ、

おきいで、

そして言う。

「おはよう。」

「おはよう。」と。

よろこびと力に満ちてはつきりと。

おゝ、このことばは生きている。

なんという美しいことばであろう。

このことばの中に、人間の清さはいまも残つてゐる。

このことばより人間の一日ははじまる。

(風は草木にさゝやいた)

学習の手引

(1) 「生きたことば」の作者のいう、力のある生きたことばは、どこから出るどんなことばか。

(2) 詩の方で、「おはよう」ということばが生きているというのはなぜか。

(3) 國語の学習について反省し、みんなで話しあう。

五. 昆虫記

フアーブル

日が暮れかかると、井戸掘りさいちゅうの「じがばち」は、石のふたで戸じまいをして工事場から出て行く。そして花から花を追いながら、どこかへ行ってしまう。が、その翌日は、前日掘つておいた住まいに、青虫を持つてちゃんとどつて来る。また「はなだかばち」は、獲物をかついで、砂でふさがれてその辺一帯の砂地と見わけのつかなくなっている玄関口に、いつもびたりとおり立つ。かれらの一べつとその記憶とは、あやまつことのない確かさがある。いわば昆虫には、われくにはそれに似寄つたものもない一種の方位感、私がかりに記憶と呼んでおく一つの能力があるとも言えよう。記憶と呼んだのは、ほかになんとも言い表わしよがないからだ。私はできるなら、昆虫心理学のこの点にいくらかでも光明を投じようと、ひとわたり実験を施してみた。

最初の実験の相手は「こぶつちすがり」。朝の十時ごろ、同じ傾斜地の上、同じ部落で、巣穴の穴掘りや食入れにいそしんでいた雌を十二匹捕らえて來た。おの／＼のとりこは別々に紙袋に閉じこめられ、一つの箱の中に入れられる。そして巣の敷地から一キロメートルばかり離れた所に放たれる。もちろん、私はその前に、あとで見わけられるように、不变色の緑の具で胸の中央に白点をつけておくことを忘れなかつた。

これはちは、いろんな方向に向かつてちょつと飛び立ち、草の葉の上に足をとどめ、太陽がまぶしいのか、しばらく前足で目をこすつてゐる。それから、少しも迷わず、南の方、かれらの住まいの方向をさして急ぐのだった。五時間後、私は巣の共同敷地にもどつてみた。そして白いしるしのついた「つちすがり」が二匹、もう仕事をしているのを見つけた。まもなく、第三のものが足に「ぞうむし」をさげて野から歸つて來た。それから第四のものがそのあとに続いて來た。四匹のは、ちがやりおせたことは、おそらく他のものも、もうとつくに成しとげてしまつたか、でなければ、これからやりおこせるであろう。

しかし、半径二キロメートルほどの所は、多かれ少なかれ、かれらに知られてゐるといふこともありえよう。私は距離をもつと遠くして、このはちが知つてゐるとはとうてい思われないような出発点で、もう一度実験をやりなおす必要がある。

そこで、その朝材料を捕らえて來た同じ巣穴の群れから、私は九匹の「つちすがり」の雌を捕らえた。選ばれた出発点は、巣穴から三キロメートルばかり北にある隣町だ。もうだいぶんちそくなつたので、はちは運ばれて來た箱の中で夜を過ごすことになった。

翌日の朝八時ごろ、私はこんどは白点を二つずつ胸につけて、それから、一匹ずつ町のまん中で放してやつた。放された「つちすがり」は、最初二列の家並みの間をまっすぐに空にのぼつて行くのだった。ちょうど、町の混雑をできるだけ早くのがれて、廣い地平線を望みうる点にのぼろうとでもするかのように。それから屋根を見ゆるして、すぐに元氣に、南をさして矢のようになんて飛んで行つた。明くる日私が巣穴を訪問すると、胸に二つの白点をつけた「つちすがり」が五四、なんの変事も起らなかつたかのよう、工事場で元氣よく働いていた。

こうしてかれらが突然思いがけぬ遠方に運ばれた時、かれらは巣穴にもどるために、記憶をたどつているのだろうか。かれらがある高さのところにのぼつて、そこからある目標点を定めて、巣のある

方へ全飛行力をあげて飛んで行く時、はじめて見る野を越えて山を越えて、空中にゆくてを標識づけてくれるのは記憶だらうか。明らかに、そうではない。はちは今いる場所を知らないのだ。まだどっちの方から連れて來られたかも教えられていないのだ。旅行はまづくらな箱の中で行われたのだ。けれども、かれらは自分が今どこにいるかがわかる。かれらは、だから單なる記憶より以上のものに導かれている。つまり、かれらは、特別な能力、一種の方位感を持つてゐるに違いない。

私は、この能力がどのくらい鋭く正確であるか、またその効く常の條件から離れなければならぬい時、それはどのくらいにぶいものであるかを、実驗によつて証明してみよう。

幼虫への食料補給をやつていた一匹の「はなだかばち」が、巣穴から出て行つた。かれは、もう少しあつと、また獵の獲物を持ってやつて來るだらう。巣穴の入口は、虫が出かける前、あとずさりに掃いて砂で念入りにふさがれる。けれどもかれは歸つて來るや、上に述べたように、一つの勘で戸口を見つける。

何かくふうしてごまかしてみてやろうと、私は入口をひらぐらの平石でおひつてやつた。やはではちはもどつて來た。しかし、留守中に起つた大変化は、かれを少しも迷わせなかつた。かれはすぐ右の上にありて、その上をあちらこちらかけまわり、まわりをまわつてみて、その下にもぐりこんで、ぴつたりと巣穴のある方向に土掘りをやりだした。

そこで私は、はちを追い拂つておいて、こんどは近くにあつたばふんを切つて細かにして、それを厚さ二、三寸ばかりの層に、巣穴の入口とそのあたり一帯にまいた。その色合いと、材料と、ばふんのにおいとがいっしょになつてはぢを惑わせるだらう。まさかこの汚物をわが家の玄関口だと見てとりはしまい。やがて歸つて來たはちは、高みから敷地の見なれない状態を調べくして、あやまたずこの層の中心、入口の正面にぴたりとおり立つ。発掘する。回廊の口はそこにすぐ見つけられる。私はもう一度はちを遠くへ追い拂つた。

おりよくも、私はエーテルの小さなびんを持つてゐた。そこで廣げたばふんを拂いのけ、かなり廣いこけのしとねと取り換える。こけの上にエーテルをあけておくと、じきにはちはやつて來た。エーテルの蒸氣があんまりきついので、かれはちょっとわきに退いていたが、やがてそのこけの上に飛びおりて、障害物を通過してわが家にはいつて行つた。

こんどは昆虫を案内する力のある、特別な感覺の座といわれる触角の方面からためしてみようと、「はなだかばち」を捕らえ、触角を根元から断ち切つて放してやつた。虫は矢よりも早く飛んで逃げた。私はもどつて來るかどうかははだあやぶみながら、たっぷり一時間ほど待つてゐた。はちはもどつて來た。そして触角のあるはちと同じように、やす／＼と自分の住まいにはいつて行つた。

かくて、外見を変えた敷地も、色彩も、においも、材料も、また傷口の痛みも、すべてはちを惑わすことはできなかつた。私は、昆虫が何かわれ／＼に知られない能力を持つとしないかぎり、どうしてもこの問題を解くことができなくなつた。

その後、一つの実験の機会がうまく現われて、新しい見地からこの問題を再び取りあげることになつた。それは「はなだかばち」の巣穴を、ひどく無理をせずにすつかりむき出しにするこことだ。この目的のために、砂は少しずつ小刀の先でかき取られた。屋根がなくなつてみると、この地下住宅はまづぐな、あるいは曲がったみぞだ。長さは二デシメートルぐらい、戸口であった点はあけはなしで、

もう一つの端は行きどまりで終り、そこに幼虫は食物のまん中に横たわっている。

母虫は、もどって来た時、どうふるまうであろうか。もちろん、母虫はその幼虫に食物を與えるためにやつて來るのである。けれども、この幼虫の所へ行くには、まず戸口を見つけなければならぬ。裸虫に戸口、それがこの問題においては別々に考察されなくてはならないと思われる二つの点だ。私は、それゆえ、まず裸虫と食物とを取り去つた。すると廊道の底は空虚な場所になつた。これで用意はできた。

やがてはちがやつて來る。そして玄関しか残つていないので戸口へ、まっすぐに行く。そこで、表面を掘つたり、掃いたり、砂を飛ばしたりして、頭で押せばらくにあいて通路を作つてくれる。あの動きやすい戸じまりを懸命にさがしている。が、動きやすい材料のかわりに、かれはまだ掘り返されていい堅い地盤に出くわす。この抵抗を感じると、かれは地面を調べまわすだけにしておく。地面といつても、それはいつも出入口があるはずの場所のごく近くだけだ。「戸口はそこにあるのだ。よそにはない。」といふかの確信は、それほど確かなものだ。私は、幾度かわらでそつとかれを他の点に押しやつた。虫は私のするまゝになつてゐる。けれどもかれは、すぐさまその門の敷地にもどつて來る。時々、半暗渠となつた廊道は、いくらかかれの注意をひくらしい。二度か三度、私はかれがみぞを端から端まで通つて行くのを見た。かれは幼虫のへやの行きどまりに行きついで、それを注意もせずにひつかいてから、入口のあつた点に急いでどり、そこでまた強情に探索を続ける。

それでは、幼虫がいたらどんなことが起るか。これが問題の第二の点だ。私は、実験のために、もう一つの新しい巢をさがした。

巢穴はさつきと同様、端から端までむき出しにされた。けれどもこんどは、幼虫や食物はそのまゝにしておいた。ところで、玄関でも廊道でも、幼虫とその食物の双翅類の山のある底のへやでも、すみからすみまで手に取るように見える、このあけはなしの住まいの前で、はちは例のごとく入口のあつた点に足をちろす。母虫が掘り、砂を掃くのはそこだ。母虫が幾寸かの半径内にある他の場所で、ちょっとためしたのち、いつももどつて來るのはそこだ。苦しみもだえている幼虫のことなど全然問題にしていない。それは、さしあたり彼女にとって、地面の上に散らばつてゐる小石や土くれとなんの異なるところもない。幼兒のゆりかごに行くために死力をつくしてゐる母親にとって、いま必要なのはただ單なる出入口だけだ。むすこは目の前で太陽に焼かれてゐるのに、母虫は今は存在していない通路をさがすことしか考えていない。このころかな母性愛を前にして、私はたゞ驚くのほかはなかつた。

母虫は長い間迷つたあげく、結局、もとの廊道の残りであるみぞの中にはいる。時々、廊道の底、現に幼虫の横たわつてゐるその地点にまで達する。母と子とは対面する。長い間苦しみもだえたあとこの対面に、なんらかの母の喜びのしるしがあるだろうか。母虫はその幼虫を見覚えていない。彼女は裸虫の上を歩く。ようしゃなく踏みつける。へやの底を掘つてみようとして、むざんにけとばしてうしろの方に踏みのける。押し出す、ひっくり返す、放逐する。こんなふうに手あらくされると、幼虫の方でも考へてくる。私は、それがまるで獲物の双翅類の足でもかじるよう、えんりょなく母虫の跗節に食いつくのを見た。母親は羽音を立てながら、驚いて姿を隠してしまう。そして、再びその好みの場所、住まいの玄関にもどつて、そこでいたずらな探索を続ける。

これが本能の諸行爲のつながりである。それはどんな重大な事情でも乱す力のない一つの順序をも、

つて、一つが他を呼び求める。入口がないということのために、第一の行爲が果たされない。それで次の行爲も果たされないので。

本能と知力との間には、なんという深いみどがあることであろう。母が知力に導かれる時、こわれた家の木くずの中を通して、まっすぐにむすこの所に行く。本能に導かれる時、それはもと戸口であつた所にあくまでたゞみづくしている。

(山田吉彦訳「昆虫記」による)

學習の手引

- (1) 何について、どういう目的で、どんな実験がなされたか。
- (2) この実験によつて作者の知りえたことは何か。
- (3) 昆虫や植物について觀察してみる。
- (4) こういう觀察・実験ができるのはどういう心持や態度でなければならぬかよく考えてみる。
- (5) 動物記をもつと読んで、大要を記録しておく。

六潮目

宇田道隆

ある秋晴れの日に、私は海岸にある山の上にのぼつて行つた。海は静かにひらけていた。岸に白くだけてゐる波も、こゝまでは音が聞えてこないから、不思議に静かな感じを與える景色であつた。海の上に、一本のやゝ廣い線を引いたように、全く波のない、油を流したよくな所が続いていた。その線はまっすぐにのびてゐるのではないか、遠く沖の方へ走つて、先はわからなくなつてゐる。ちょうどその時、十二、三歳の男の子がふたり私のいる山へのぼつて來た。私はさつそく、かれらに、あの海の上の線はなんだか知つてゐるかときいてみた。

「知らないよ。」

と、かれらは答えたが、その中のひとりはすぐに、

「あそこには魚がいるよ。」

とつけ加えて言つた。

私はかれらがその名も知らず、そのできるわけも知らぬが、あそこの帶のようなすじの所には、「魚がいる。」と言つたのをたいへんおもしろいと思つた。そうしてよく見ると、その線に沿つて点点と漁船の浮かんでいるのが見えた。海の水面に見える比較的幅の狭い、帶のようなこのすじが潮目である。そのすじは、あわや、ごみや、あるいは海藻など、水に浮くいろいろのものが集まつてゐることもある。またさゞ波が立つてゐるもの、あるいは全く油を流したように靜まつてゐるものなどがある。それが潮目と呼ばれてゐるのは、潮の目、すなわち二つの異なつた潮の境目、筋目という意味を持つてゐる。そのすじが、どんな理由や條件からできるものであろうか。

潮目の現象に、最初に氣づいたのはだれであつただろうか。それは、おそらく海に實際に出ていた人々であつただろう。私が山の上で会つた漁村の少年たちは、あそこには魚がいるということを知つていた。かれらの祖先は代々この漁村に住んでいて、早くからそのことを知つてゐたに違いない。それがどうしてできるものか、どんな性質を持つてゐるかは、かれらは探ろうとしなかつた。しかし、

海の上に見えるこの不思議なすじの所に魚がいることは、よく知っていたのである。

漁業に従っている人たちばかりではない。航海者などもまた気がついていたのであろう。こういうことは、実地に当たっている人の経験から生まれてきたことが多い。それがだん／＼学問的に、科学的に追求されていった。そうして、ついにその正体がわかるようになったというのが、順序のようと思われる。

それでは、学者たちはいつごろからこれに気づいていたであろうか。

大航海者キヤブテン・クックは、その第三回航海の時に、船乗りたちが「海ののこくず」と言つてゐる、この現象に気がついている。

また、有名な生物学者ダーウィンは、一八三一年、かれがちょうど二十二歳の時に、英國の軍艦ビーレル号に乗りこんで世界一周に出た。翌三二年に南大西洋・南太平洋・インド洋の熱帶海で潮目の現象を見て、後に著わした「ビーレル号航海記」の中にそのことを書いている。

かれらは、ある日チリの近海で赤粘土のどろ水の川のような色をした水の帶を通過した。そのチヨコレート色のようになに濃い赤い水と、本来の海の青い水とが接している線は、はつきり分かれていた。また、くじらのえさになる甲殻類の群集のためにできた、あざやかな赤色をした水の細長い帶を見たこともある。

またガラバゴス島の沖では、長さ数海里で幅数メートルの、暗黄色かどろ色をした三つのしま状をした水帶を見た。それは、くねくね折れ曲がつていたが、まわりの青い水とははつきり区別されていた。ダーウィンは、どうしてこのように生物の群集が帶状になつてゐるのか、その帶の長さや狭さを定めるものはいったいなんであるか、流れの作用と何か関係したものには違ひないが、どうしてできるのかわからない。全く不思議であるという意味のことを書いている。

英國の大科学者で、アルプスの登山家としても有名なチンドルも、また、その「アルジエリア旅行記」の中に、潮目のことについている。それは、ジブラルタル海峡附近で、水の色の生きくした緑と、深い青色のさわだつて違つた海流の境を横切つたことがある。その時、船のへさきに立てば青い澄んだ水をくむことができ、ともでは濁つた緑の水をくむことができたといふのである。

大洋の風と海流との図を、はじめて作りあげたアメリカのモーリーは、一八五八年にその著わした本の中に、海上の不思議な現象として、潮目のことと書いている。

このように、クック・ダーウィン・チンドル・モーリーなどのすぐれた科学者たちは、早くからこの現象に気づいていたのである。

日本ではどうであるか。明治二十五年、水産予察調査報告というのに、茨城縣の沖に、春、著しい潮目が見えるということが書いてある。これが私の目にふれたいしばん古いものであつた。

また、北原多作先生は、捕鯨船の船長や漁船の船長にいろいろ／＼だずねたり、その他の方法で、金華山の沖に潮目があつて、そこには、まつこうくじらがよく集まる。また、かつおもその辺に群れているということを確かめられた。そこで、「二つの海流が合う所、すなわち潮境は、魚の集まるよい漁場になつてゐる。」「潮目は漁場の目じるしになる。」といふ説をたてられた。これこそ北原先生の発見された法則であつて、水産学上誇るべきものと思われる。

學習の手引

- (1) 潮目とは何か、いつごろ、だれが氣がついたか。
それをさらに短く表に書いてみる。
- (2) 経験と學問とはどんな關係にあるか、やさしいことばで發表する。
- (3) 何かについて、みんなの觀察をまとめて秩序をつけてみる。

七日記から

月 日

きょう、國語の時間に、大木君が「星の傳説と花ことば」という作文を読んだ。星にはさま／＼な傳説がまつわっていて、それを思いながら、星座をながめるのは楽しいと書いてあつた。それから、あの星が、なぜ、さそりに見えるのか、白鳥に見えるのか、琴に見えるのか、よくわからないとも書いてあつた。しかし、そのような形をしていくと思つて見れば、そう見えないこともない。このことから、いつか先生から聞いた比喩のことが思い出され、それに続いて花ことばが、ふと心に浮かんできたと書いてあつた。天上には星座の傳説、地上には花ことば、何かしらおもしろいものがあるようを感じたと書いてあつた。

読み終つてから、組の者が、これについて思い／＼の感想を述べあつたが、これもおもしろかった。

月 日

大木君の作文が、一つの種となつて、組のものの討論が、いろいろなことに発展している。

きょうも、「天体の神祕」について、話が限／＼なく出た。天体のことを考えだすと、自分といふ考えがどこかへ行つてしまふ。氣持が廣くなり、自分が、空いっぱいに廣がつて行くような氣さえする。

月 日

学校園の手入れをした。雑草をむしってみると、ばつたがとんで來た。ちょうどとんで來た。ありも通つて行つた。人間よりもまだ／＼小さな生きものがいる。たとえ小さくとも、どれもどれもみんな完全な生きものだ。どれ一つとして未完成のものはない。バクテリアなどを思うと、さらに小さな世界に心が引かれる。いくら小さくても、命があるのであもしろい。

月 日

夜になつておじさんが久しづゝにいらつしゃつた。おじさんの乗つて來た汽車の前の列車が事故を起したのだそうだ。もし、おじさんの汽車であつたら、今ごろこうして会えないかも知れない。「運命といふものは、いつどうなるかはかり知れないものだ。」とおつしゃつた。

「全く人間は、あすのこともはつきりはわからない。この不安の中で、安らかな氣持で暮らしていくには、どうしたらいいかな。」
と、おじさんにきかれて、私はいろ／＼考えてみた。

月 日

おじさんのことばが私の頭を占領している。「平安な暮らしは、いいかげんな考え方ではできない」ということ、自分の力などは実に頼みがいのないものであることをはつきり知ること、このはかない

自分を安心させるに足る確かなものにすがりつくということ——。ここまで考えた。けれども、その確かなものとは、いったい何なのだろう。

月 目

父と川へつりに行つた。流れに向かつて糸をたれてはいるが、自分のからだが川上の方にすべつて行くように感じた。

父が、大きなうぐいをつりあげて、大喜びだった。

月 日

私が、新しい討論の主題として、「確かなもの」を提案した。先生も、これがよからうと言われたので、それにきつた。「確かなものは、いつまでも変わらないものだ。」とか、「いや、変わるということがそのことだ。」とか「目に見えているものや、形になつているものは、確かなものではない。」とか、いろいろ話がはずんだ。

私は「永遠なるもの」ということが新しく氣にかかりだした。

学習の手引

- (1) 作者の考へてゐる問題の発展を調べて、その進み方を記述してみる。
- (2) 「確かなもの」「永遠なるもの」について話しあう。
- (3) 自分の考へてゐること、迷つてゐることを作文に書いてみる。

八 初夏の奈良

荻原井泉水

奈良はいつ來てもよいが、ことに新緑のころがよい。さくらのころに來た時には、まだ黃色に枯れてしまふであつたしばは、生き／＼と青くなつて、しかがその上に寝ころんだり、また、その青い芽を、たべたりしていた。

猿沢の池のやなぎは、もえぎ色をしたその若々しい美しさが、やゝ老いて、こんもりと葉を茂らしつゝ水に映つていた。春によく來る團体の客のざわめきも今はなくて、池のふちにあるベンチには、木陰を求めて子供を遊ばせている女がいるばかりだつた。

荒池のほとりは、なじ静かだつた。奈良ホテルに沿つて、葉ざくらのほの暗いほどとの小道を歩くのもよかつた。池には遠くの興福寺の塔の影が映つていた。その水に石を投げて水の輪が廣がつて、それが消えて行くのを待つては、他の子供が石を投げるのであつた。

うめの木が林をなしている所では、園丁がその枝をふろしてはいた。しばの上に落ちた青葉には、しが寄つて來て香をかいでいた。

嫩草山・三笠山・高田山が、それ／＼にこんもりとして輝いていた。高畑のからりとしたしばふの上には、大きな花が咲いたように美しいこゝもりがさが動いていた。あせびの花はたいていすがれていたが、その花の多い谷のようになつた道には、美しい影ができる、細かくもれてひそんでいる光のたわむれもあもしろかった。

春日の社に近いすぎの木立は夏らしく黒み渡つて、その葉の先から、愛らしい浅緑のつめのような

若葉が出ていた。お参りの人の多く通る道には、しかがたくさん待ちうけていた。私は手に持つているだけのせんべいをみな與えてしまったが、かれらはまるくとしたかわいい目を私に向けて、いつもでもせびるようについて來た。一匹のしかは私の前で首を上げたり下げるなりした。それはおじぎなのだつた。私はおとなしく私の前に足を折つてあるしかの背を、いぬにでもするようになでてやつた。文字どおり鹿子まだらのそのはだはつやくしてた。五月は毛なみの光沢のいちばん美しい時だということである。抜けかわつてまだまもない角は、やつとY字形になつたばかりで赤みを帶びて、柔らかそうちだつた。手に握つてみると、その赤い色の血のぬくみが感じられた。

南大門の通りには、つばめがたくさん飛んでいた。そこらにたゞんでいるしかの細く高い足の間を、すり抜けるかと思うように飛んだり、角細工などのみやげ物を並べている店の軒に、ついと飛び入つたりしていた。

大佛殿を左へ、まつ林の間を行く道の感じもよかつた。草が長く伸びるまゝになつていて向こうに、実に古い堂が見える。それは戒壇院らしかつた。顧みると、大佛殿の屋上の鳴尾が、金色さんらんとしてまつの間に高くそびえて、まつのこずえにはせみがじい／＼と鳴きはじめていた。轉害門は奈良に残つてゐる建築のうちで、最も古いものの一つであるが、その簡素にして雄大な結構は、すばらしいものだと思つた。私はその門をはいつて大佛殿の裏を歩いた。竹がわつざりと道にたれていたり、かきの若葉が日を照り返していだりした。古い寺院の土べいがくずれたことによつて、かえつて絵画的に見えるような、さびしいひつそりとした道だつた。築地のそそにはきんぱうげが咲き、白い小さなちょうが休んでいた。

嫩草山と春日山との間にある谷の道は、若葉の緑が顔にうつるような、ほがらかな感じの所だつた。つま先あがりに、苦しくないほどの登りになつて、山の奥に踏みこんで行く。ほらのかえでといふ名のついて、いるとおりに、かえでがトンネルのようになつており、高い木には、ふじがあちらにもこちらにも咲きたれていた。奈良はふじの花の多い所だが、公園の茶屋のそれなどは、ちくかたすがれてしまつてゐるのに、こゝだけは、まだふさ／＼とした紫をたれて美しかつた。奈良の若葉はいいなと、私はいまさらのようと思つた。

私は緑の深い中を縫いながら、あてもなく歩いた。

(觀音巡礼)

學習の手引

- (1) 初夏の奈良を心に描くことができるか。
- (2) 作者の歩いた道を地図に書く。
- (3) 色彩・動植物・自然に關する語を拾つてみる。
- (4) 描写のじょうずなところはどこか、捨いあげてみる。
- (5) 自分の住んでいる土地の様子を写生文に書く。

九 りすを育てる

中西悟堂

山の草刈り人が見つけておいたりすの子が、巣ごと私のもとへ届けられたのは、七月の初旬であつ

九 りすを育てる

三十三

た。すぎの皮とはいものの、細かにほぐしたものを、あむようにしてまるめてあるので、手ざわりも色合いも、むしろ、しゅろの毛でつくつたといいたいようなその巣の中には、三匹の子りすがいた。生後一ヶ月と推定されるこの子りすたちは、まだ歯が目だたず、からだに比較して頭が大きかつた。尾はまだ細かつたが、それでもむじやきそのもののようなおしりの上に、いかにもちとならしくその細い尾をびんと立てていた。

しかし、なんというかわいらしい目つきや足つきであろう。うすい茶かつ色にくまどられたまぶたに守られる目は、まるで黒曜石のように輝いて、あらゆる哺乳動物の乳児に特有な、涼しい張りを見せて、いるし、鎖骨のある前足は、おの／＼の指が離れていて、まるでかえでのようになどけない。毛のはえている小さな耳、柔らかなスロープをつくる前額、いちょうの実の兩端のような形に切れあがつた目じり——今のうちは、まだすばしこい動作を示さず、胃のふさえ満ちていれば、三匹がころころとかたまりあつて、眠りほうけているのである。

しかし、りすを乳児から育てた経験のなかつた私たち家族の間では、どうして育てるかが最初の問題であつた。哺乳動物だから、乳を飲ませればいいことはわかっている。が、どうして飲ませならないのか。

私たちはあれこれと考えたすえ、試みに脱脂綿に牛乳をふくませた。そうして一匹一匹りすを巣からつまみ出して、その鼻先へ、一方の指先で牛乳をふくませた綿をあてがつてみた。乳児たちは、前足でその綿をひしとかゝえこみ、長いあと足を手首にからんで、うつ向けた私のてのひらへ、あお向けにぶらさがつた。そうして、母の乳ぶさをしづるよう、かわいい前足の指先で、綿を押しては乳

をしづりながら、うまそうちにゅつちゅつと吸うではないか。そこで、子りすたちがせつせと綿を押す時には、かれらを失望させないように、私は、三本の指先で強く綿を押して、とく／＼と牛乳を口に流しこんでやる。それで、母の乳ぶさからあいしい乳をしづつたつもりで満足しているのだ。だが、そうなると、脱脂綿の方も、乳ぶさの形に突起のあつた方がいいので三四が一度に飲むことができるように、三つ以上の突起をこしらえてやる。その方がくわえるのにも便利だし、綿の中へ鼻を押し入れて窒息したり、乳を鼻から吸いあげたりすることも少ないわけである。

たゞこれだけのことだが、はじめのうちはぶきようで、指先から手首へ傳わつてぱた／＼落ちる乳のしづくで、子りすの腹をねらしたり、綿を強くしづり過ぎたために、子りすをむせさせたりする。が、なれるにしたがつて、今まで親指と、人さし指と、中指だけでつまんでいた綿を、やがては、五本の指でつかむようになり、その五本をうまくあしらつて、三つの乳ぶさ、すなわち綿の突起から同時に乳をしづりながら、三匹の子りすに、一度に飲ませることもできるようになった。それから、牛乳には砂糖も入れて、味の調節もしてやる。もちろん、七月の上旬・中旬といえれば、牛乳の腐敗も早から、牛乳屋に頼んで、毎日早朝と、午後とに、五勺ずつ配達してもらう。そうして、腹いっぱい飲ませて巣へもどせば、子りすたちは、柔軟自在ながら、文字どおりまるまりあつて眠つてしまつたり、あお向けにしたりしながら、文字どおりまるまりあつて眠つてしまつ。が、みなさんは想像することができるだろうか——三匹の小さなりすが、一度に私の手にぶらさがつて、ちゅつちゅつと小さな音を立てながら、砂糖入り牛乳をむさぼり飲むかわいらしさを。また、一息つくごとに、その無心な黒目が私の顔か、てのひらか、それともどこという意味もないような一点を、珍しそうに、ま

じめに見つめるのを。私が乳を與えていたる間、家族はほとんどつきさりで子りすを見ている。そうして「まあ、かわいい。」と感にたえぬように言つたりしているが、そのうちにがまんができなくなつて、ついと私の手から子りすを奪い取る。

「よせよ。乳を飲んでいるさいちゅうに。」と、私がしかるのをしりめにかけて、こんどはほかの者がいつしようけんめいに乳を與える。

「ねえ、たゞ、りす、りすじゃつまらないでしょう。」と言ふ。

「つまらないとは。」

「だつて三四もいるのですもの。めい／＼に名まえがなげりや……。」

「そうだな、なんかい名まえはないかな。」

「たまじゃどう。たまに、ころに……。」

「いやだね。そんなねこみたいな名は。」

「じゃ、りちこはどう。ふだんみんなで『りち公、りち公。』と呼んでいるじゃないの。りち公よりは、りちこの方がかわいいでしょう。」

「うん。それでもいい。そうしよう。」

「それから、あとの二匹は。」

「めんどうだから、みんなりちこでいい。」

みなさん、たわいもない家庭風景などを聞かされているようで、少々迷惑だろう。が、およそ子りすたちに關するかぎり、ほとんどいっさいがたわいないことだ。たわいのある、能率のあがる研究などをしていたのでは、子りすたちは、人間となんらの交渉も持ちはしない。研究研究とあまり肩を張らずに、たわいなくかまつっているうちにも、おのずから習性の觀察などはできていくのだ。ともかくも、この三匹は、共通のりちこといいう名で、私たち家族に育てられていく。体長約十センチ、尾長約九センチ、暗黃かつ色の尾は、子供たちが俗に「ねこじやらし」といつている禾本科植物の穂を、そのまま長くしたような線状を呈していて、毛の先端は白い色にぼかされている。

さて、こうして牛乳で育てられていくうちに、早いもので、同じ七月の二十日ごろには、だんだん歯も目だつてくるし、りす特有の跳躍もできるようになる。そして、尾をびんといかめしく立て、長いあと足で床の敷物をけりながら、ぴょこんとうさぎのように、しかしあざやかなすばやさで、へやをかけまわり、あるいは、三匹が、互に尾を追っかけあって、じやれまわつたりしている。

ちよつとこゝで、歯のことを言わせてもらうが、いつたいりすの門歯は、くるみのような堅い実や、樹皮などをたべる必要から、上下両あごの各一対とも、すこぶる鋭く曲がつており、そして、その門歯に、のみのような強い働きをさせるために、それがあご骨にはまる部分は、露出部よりも長くなっている。

また、前面のみにほうろう質があるので、物をかじるにつれて他の部分はすりへり、したがって、ほうろう質をかぶったのみは、ます／＼銳さを加えていくが、しかも、これは、内側から絶えず新しく生ずるために、のみはいつでも鋼鉄のようだ。

それから、りすには犬歯といいうものがない、前面の門歯から間をへだてて、一足飛びに、食物をこなす臼歯きゅうしになつていて、いまでもなく、これもまた、門歯が球果をうがつ時に、他の歯がこれに接

していてはじやまだからで、要するに、いつさいが物をかむのに都合がいいようにできているのだ。こういう特徴は、すべて、私のもとへ送られてから、二週間めに顯著になってきた。

歯とともに著しく発達していくのは、樹上生活に便利な諸点だ。屈伸自在ながらだ、跳躍に適する猿くて長いあと足、樹枝を握るのに都合がよいようにわかれた指、樹幹をよじ登るのに必要な鋭いつめ——りすはこれらの構造のちかげで、いたちや、きつねなどに追われた時は、尾を頭の上までくるりとなびかせて、そのへんぺいな屋根の下にからだをかくす。もつとも今のところでは、尾のそうした特徴はまだ現われず、あいかわらずねこじやらしといふ、あるいは、とつくりをそうじするはけとでもいうかのような形でしかない。跳躍の方も、まだ五、六十センチだ。そうして、ぴいつという鳴き声をあげながら、大きな頭を振り立てて、ぴょこんぴょこんと歩いているが、この大きな頭も、後に胴の部分がそれに應ずる程度に発達することを示しているものだ。が、なんという品のよい色合いであろう。さびた赤色を帶びた四本の足、豊かなくろ色の体側、それが腹部へ移るにしたがつて次第にうすくなり、腹部で純白になる諧調。背面のしぶい灰かつ色。總じて純日本的な、はででないうちにりんとした氣品を漂わす色彩は、はなやかな万華鏡まんかきにそろ／＼飽きのきた私をじゅうぶん魅するにたる。

さて、このくらいに育つてくると、私たちには、いち／＼綿に乳をふくませるめんどうをしなくても、なんとか簡単に乳を飲ませる方法があるまいかと考るようになる。また、ねこを飼っている私のうちでは、監督なしにへやに放しておくわけにもいかないので、私たちがいそがしくてかまつていられない時でも、りすじらしが勝手に遊びたりひれていられるようなら、ゆったりしておこうといふ考えにもなる。ちょうどさいわい、じゃかごの不用なのが一つある。

これは、約六十センチ立方の金網で、底は亞鉛板だから、このかごなら、りすの鋭い歯にかみこわされることはない。そして、中には、まだい／＼しい葉のついたくぬぎのこずえを立て、底にはわらを敷きつめてやる。もつとも、夜の寝床だけは、ふるさとのりすの巣をそのままにして、わらの中へうめておく。りすのかごによく車を入れてやる人があるが、もし車がなければ、どういう運動をするかと思つて、わざと車を入れずにおく。ところがいいあんばいに、かれらは、きゅつきゅつ、くづくつという甘つだれた声をあげ、廣い室内よりは、かえつておにごっこに都合のいいこの金網の中で、縦横に枝や、網の目を傳いながら追っかけっこをするのだ。一匹が、他の者の尾にとびつく。と、相手は、わらの上でくるりと一つあざやかなもんどりをうつて、逃げながら枝に移る。追う方も急いで枝に行く。と、こんどは、相手は、あと足で枝からたらりとつりさがつて、そのまゝすとんとわらの上に落ちる。かと思うと、樹皮をかじり、葉をたべ、四角な金網を、一直線に下から上へ、天井から下へとひとめぐりする。このひとめぐりがなかなか／＼おもしろいと思つたらしく、偶然に覚えたこの運動を、まず、体格のいちばんいいのがなんべんでもくり返し、ついには、ひんぱんにこれを続けて、車のかわりにしている。

乳を飲ませる道具の方も、綿からスポットにかわつた。乳を吸いこませたスポットの口を、金網の目にあてがう。すると、りすたちは、急いでそこへ集まつて来て、スポットの口から牛乳をすゝる。どうせわがちなのだから、いちばん発育のいいのが、いつも先に腹いっぱい飲むことになる。人間の場合は、分別のある行動の方が美しく見えるが、獸、それも幼い獸は、かえつてこの方がかわい

らしくみえる。それにしても、交互に落ち着いて飲めるようにしたいと心配したが、そこはよくしたもので、二番めに大きいのが、おもしろいぼうぎよ法を発見した。それは、じょうぶな門歯をしつかり金網の目にからむことだ。こうしていれば、せつかく飲んでいるさいちゅうに、いちばん強いのに頭で思いきりこすかれても、自分の口は元の位置を離れずにする。そうして、からだじゅうの力を門歯に集めて、ぐんぐんと乳をむさぼり飲む。やがていちばん小さいもの、この方法を習得してがんばりだした。が、それでもまだ、お互にらくらくと牛乳の分けまえにはありつけないだらう。その上、こんな競争をしたのでは、スポットの先をかみくだいて、ガラスをたべる危険もじゅうぶんにある。そこで、やはり順々にひらへのせて、乳を飲ませる方がいいということになつたが、うつかりすると、見わけそこなつて、同じ子りすに二度続けて飲ませないともかぎらないので、うちの者の発案で、とり／＼に色の違う人絹の首輪をしてやることになった。いちばん大きいのと、次のとほ、大きな区別がよくつくので同じ色の赤い首輪、三番めのが黄色い首輪だ。これはなか／＼うまい思いつきで、順々に飲ませてやることができる上に、首輪をしている姿が、小さな動物をいつそくわいらしくする。

七月が八月となつた。むし暑い日が続くので、清涼な山地に住むはずのかれらにとつて、人間の家の生活が適應したものでないことが、憂慮されてくる。からだがいちばん大きくて強いのだけは、元氣に網の中で曲藝のようなことをしたり、わざと日の当たるところで、長々と四つんばいに寝ころんで日光浴をしたりしているが、あとの二匹は、目だつて食欲が減退し、動作がふかっぱになつてくる。山の人のうわさによると、私のもつたちとほとんど同時に、山で見つけて他の家へ送つた子りすたちは、炎暑のためかどうかは不明だが、ともかく、全滅したという。そんなことを聞くにつけても、不注意にはしておけない。そこで私たちは、晝は、庭の木陰にかごを置き、夜は、いちばん涼しいへやや、また時には、ねこの夜間の通路にと穴を開けておいた、湯殿のドアのそばの風通しのいい場所にかごを移す。が、いろいろの注意もむなしく、八月八日のむし暑い夜、いちばんちびが、すつかりまいつてしまい、夜明け方になつて、介抱のかいもなく、私のてのひらの上で、もろくも死んでしまつた時には、少し感傷的かもしれないが、私たち家族の悲しみは少なくなかつた。

人は、ばか／＼しいと笑うだろう。が、私たち家族には、「死んだよ。」ですましていられない気持があつた。かりに、私のてのひらの上で横たわっているかれんな獸が、からだは、えびのように曲がつて堅くなつていても、目だけは、命のあつた日と同じく、涼しく張られているかつこうを、思つてみたまえ。たとい、たわいないことがらばかりであろうと、ともあれ、愛情と名のつく感情を傾けて暮らした私とすれば、これが、もう生命を土にかえしたむくろ、魂の飛び去つた一かけらの物質だとは、思いたくない。そこで私たちは、まず、この子りすの首輪を、他の同腹の兄弟たちと同じ赤い人絹に取りかえてやつた。そうして、庭のすみに穴を掘つてわらを敷き、死がいをその上に横たえてから、いつも好物だった日本ぐるみを、生きていた時の思い出に、むくろのそばに添えてやつた。それから、土をかぶせてしまふと、「うち公の墓 わら床にくるみを添えて 昭和八年八月九日」と書いた棒ぐいを、土まんじゅうの上に立てた。あとから考えるとおかしいが、数株のさきようが開花している涼しいはぎの下陰を墓地としたのも、せめて、死がいが早く腐敗しないようにとの心やりからであつた。そして、私は今でも思うのである。「あのりすの死がいを、ねこのごちそなどにしな

くてよかつた。」と。

さいわいに、させいはこれだけですんだ。ところが、このちびの死とともに、もう一匹のちびの方があめつきりじょうぶになり、翌日からはにわかに食欲も盛んになつた。そうして、まだ乳離れこそしないが、一とうもろこしや、日本ぐるみのほかに、にんじんや、いもや、なんきん豆や、木の葉などもたべるようになつた。

やがて、季節があめぐつて九月の中旬以後になれば、わざ／＼割つてやらなくとも、自分で堅いくるみに穴をあけるようになるだらう。ついで、何よりも好物なくりの季節になるし、かきもまた、なかなかの好物に違ひあるまい。

子りすたちは、一日一日と私たちになれ親しんでいく。そうして、ちょっと腹でもなでてやると、子ねこかいねころのように、くるりとあお向けになつてみせ、てのひらにのせてからだをかいてやれば、こゝちよげにうずくまる。また、かごのそばを通して、着物のえりをかんだり、えりにはさんであるつまようじをかまわつて行くし、ふところに入れれば、網目を渡り歩きながら、人の行く方角へじつたりして、余念もなく遊ぶ。たとい、人の指先をかむことがあつても、もちろん、ふざけているのだから強くはかない。あたかもいねが飼い主の手をくわえて、たわむれるようなものである。人間がかまつてやらないと、兄弟どうしで上になり下になりして、すもうをとつてている。それにもあきれば、あと足のつめで枝からさかさにつりさがつて、機械体操のように前後に大振りをやつてゐる。いよくこれで子りすたちも、家族の一員らしくなつてきたわけである。

九月中旬にはいると、はたしてかれらは、日本ぐるみを自分で割るようになつた。恐るべき歯のみではないか。くるみは、人間ならば火であぶつて合わせ目からほうちょうを入れ、針のようなもので掘り出したりしてたべるのであるが、りすは、つぎ目のない胴つ腹に穴をうがつて、食い破つていくのだ。よく知つてゐるもので、こうすれば、人間がナイフで掘り出すようなところでも、いきなり歯が当たつていつて、かすをあまさず、果実を全部たべることができるのである。こんな歯だから、へやで遊んでいる所へ、ねこがはいって行つたのを氣づかつたりして、あわててつかまえてやろうとした時、人間のあわただしさにびっくりして、たま／＼人間にかみつく痛さといつたらない。皮膚などはひとかみで破つて、鋭い歯先で肉深く刺す。いろいろのどちらのうちでも、特にくりはあいしいごちそうだ。この時分は、もう山から持ち越しの巣は、ぼろ／＼にちぎれてしまい、かれらはわら床の下側に、別に自分らで、細かくわらをちぎつて寝室をつくつてゐたが、この中で、たといあうして、長い尾とあと足とを三脚のような支柱にしながら、体重を尾にゆだねてすわり、一対の前足でくりを抱きながら、せつせと口で皮をむきはじめる。そのじょうずなこと、かれらは、手のよくな働きをする前足の先で、絶えずくりをひっくり返しながら、順次に皮をむしり取つてはあたりに飛ばし、ついで、歯で剥皮を巧みにむいて、さながら、人間がナイフでむいだようにしてからたべる。「栗鼠」とはうまい字をあてたものだと、つく／＼思う。それにしても、親からもだれからも教わつたことのないこういう技術のよつて來たるところは、やはり、本能の祕密に歸すべきであろう。それに、すわった姿勢のかわいらしさが、また格別である。

ところが、九月下旬のある朝、大きな方の子りすが、はからずも、戸外に遊びに行つたきりになつ

てしまつた。はじめは、後庭の雑木林のえごの木のこずえ、次にはくりの木のこずえ、三度めには道を横ぎつて、向こう隣のすゞかけのこずえへと遊び歩いているのを、次々と追いかけたが、なにしろ、すばやすぎてつかまることができず、大好物のくりさえ見せれば、こずえからてのひらへとおもて來ながら、ついとすりぬけて、地面に飛びおりてしまう。そうして、木の下やかきねをくじつて、またくまに姿をかくす。私たちは、家じゅう總出で、まる一日追いまわしたにもかゝわらず、とうとうその日はそれなりだつた。ところが、その次の日には、付近の住宅地を遊び歩いていたという報告を聞いた。お宅のりすららしいのが、私のうちの庭の木にいましたといふような報告が、近隣から来る。「首筋が赤いのは、ふうがわりなりすですね。」とも言う。例の赤い人絹の首輪がはげて、首筋を染めていたのだ。五日めにはうまいぐあいに、庭内のじゃり道傳いに、玄関の前まで歸つて來たが、女中が「あ、りち公が歸つて來ました。」と叫びながら、うれしまぎれに玄関のドアから飛び出した勢いに、かれは大いにめんくらつて、また／＼住宅地の方か、林の方かへはねて行つてしまつた。なしろ、そこら一面にくりの実はみのつていて、ちょっと遠出をすれば、畑にはくさいもある。林じゅうの秋のきのこ、ふんだんな樹皮や樹葉といふように、食料の豊かな、まるで食堂そのもののよくな場所なのだから、容易に歸つて來ようとも思えない。こんなことで、九月の下旬には、三匹の子りすが、たつた一匹になつてしまつたが、そのかわり、最後の一匹と思つてよけいたいせつにするせいか、加速度的にいよく私たちになれ、三匹分ぐらいためもしたり、慕つたりするようになつた。

九月下旬から十月初旬へかけて、私は、十日間ばかりの信州の山旅をしたが、その旅行中、^{乗鞍岳}乗鞍岳

でも、美が原方面ででも、八ヶ岳の行者小屋付近ででも、よくりすを見かけた。

付近の炭焼小屋の男の話では、地上六メートル以上のこずえなどで、木の実を摘んで落してから、自分が一足先に地上へ飛びおりて、自分よりあとから落下して来るその実を受け取るという。

「あの枝から、向こうの木のあの枝まで、一飛びに飛びまさあ。」

といふ、距離を見ると、六メートルもの間隔である。いまさら驚くべき跳躍力である。

旅から帰つてみると、子りすだと思つていたらちこは、意外にも、すっかりおとならしくなつている。旅行前には、ねこじやらしのようだつた尾が、見るもあざやかなへんべいに変わつていて、まるでこてのようだ。幅五センチ、長さは体長の二十センチよりもやゝ短くて十七センチ、十日見ぬまにがらりと様子が変わつていて、この尾を波状に背と頭の上へ波打たせていると、からだは、全くその下にかくされてしまう。前にもちよつと言つたとおり、これなら、山野に出て、たかや、はやぶさや、ふくろうにあそられた時のカムフラージの屋根になるであろう。また、冷たいトタンの上などに眠らなければならぬ時は、尾をしとねにして、その上にからだをまるめている。また、空中跳躍の時は、バランスをとつて墜落を軽くする道具にもなる。尾の用途は、よく観察してみるとなかなか多い。

が、おとならしくなつても、そのかわいらしさには、なんの変わりもない。つかんで眠らせようとすると、りちこは、二つ合わせてうつろにしたてのひらの中でも、くるりとひとまわりでんぐり返しをやる。そうして、頭をおろして眠ろうとするが、その回轉のさいちゅうに、あお向けのまゝあと足で首をかいたりする。また、ひざの上でくりを興えると、前足でくりをくる／＼まわしたり、皮を

あたりにほうり出したりするしぐさは、あいかわらずだが、おかしいことには、あと足と尾とですわつているつものの姿勢がぐずれて、やがて完全にあぐらをかいたようなかつこうになる。それらの身ぶりは、何一つとしてかわいらしくないものはない。へやに出してやれば、いすの足でも、植木のはちでも、はち植えの植物の葉でも、敷物でも、やたらめっぽうにかんで歩き、ふところの中でもくくりをやれば、懷中をくりの皮の山にしたあげく、腹がふくれれば、その皮の上で、半日も眠りこける。そのまま友人の家へ遊びに行こうが、散歩をしようが、あさまいなしだ。また、時には懷中であお向けにのけぞって眠っているあなたを、指先で突いても知らん顔をしているので、ひょっとすると、窒息でもさせたのではないかと心配して、はげしくゆすぶってみると、うつとりと、ねむそそうなる。そのまゝ友人の家へ遊びに行こうが、散歩をしようが、あさまいなしだ。また、時には懷中であお向けにのけぞって眠っているあなたを、指先で押すと鳴り出すゴム人形のようである。眠っているところをたしかめる時は、いうまでもなく、「なんだ、せっかく眠っているのに、よせよ、うるさいな。」といふことなのだ。

わら床で眠っているかつこうも、かわいいものだ。あお向け、横寝、伸びた寝ざま、まるくなつた寝姿、耳をたゝんで首だけわらにつつこんだ様子、うつろにしたわらの中から、りつぱな尾だけを出している様子……。そのりすをかまいたくなつて、わらの上から頭をたゞくと、くつくつく、ぐるぐる、ぐいい、ぐりるぐるというような声を、たゞくなびに出す。うれしい時にも、おこつた時にも、こういう声だが、なんのことはない、指で押すと鳴り出すゴム人形のようである。眠っているところをたしかめる時は、いうまでもなく、「なんだ、せっかく眠っているのに、よせよ、うるさいな。」といふことなのだ。

後庭の林の、なら・くぬぎ・くり・ねるで・はぜなどの葉が、すっかり色づいた昨今では、私は、いつもストーブのあるへやへりすのかごを置いているが、あと足ですわりこんで腹の上へ前足を行儀よく置き、きょとんとした顔つきをして、あたりをながめまわしている。たぬきの腹つどみのようなかつこうや、歩いているさいちゅうに、ふと片方の前足を上へ高くさしあげて、からだをひねりながら、同じ側のあと足で小刻みに腹をかいているかつこうなどは、人間のひとなにも子供にも見せたいユーモラスなものだ。また、窓のカーテンは、自分で遊ぶ時のいちばん楽しい遊び場だが、しばやくレールの金具までかけ登つたり、敷物の上にあお向けになつて、カーテンのふさにじやれたりする。こういう時、もしカーテンの近くにテーブルがあつて、その上によしごいが遊んでいたり、また、あたりにちゝこのはずのかごであれば、よしごいは長い首を伸ばして、不安そうに、けじんそうに、下からゆれて來るカーテンをながめ、一方、ちゝこのはずくは、おれの食料のくせに、平氣で眼前を上下したりしているのはよろしくないぞ、といふような顔つきをしている。まだ生まれてからこわいものがない無心なりちは、たとい、ねこが近づこうと、まるでむとんじやくで、ひとり悦に入つてゐるのだ。あるいは、さつきも言つたように、私のふところに飛びこんで來ると、ひとまわりでんぐり返しを打つてから、上向きの姿勢でうと／＼と眠る。ふところは、ほんとうにぐあいのよい所らしい。だから、かごの中へちょっとのひらを出すと、そこから腕へ、腕からふところへとまつしづらにかけこんで來るのが、一つの習慣にさえなつてゐるのである。

人は、よく私ことを、人間よりも動物をよけいに愛する男だと言う。子供が空腹でもさまで騒がないが、鳥獸が空腹だつたり、寒さにあつたりすると、大騒ぎをすると言う。しかし、考えてみたま

え。人間の子供は、ある程度までは、自分で自分を処理しうる環境に置かれている。が、山野にいる場合と違つて、飼われている鳥獸は、人間にたよらぬかぎり、どう自分を処理しようもない。空腹でも、ぐあいが悪くとも、訴えるすべさえ知らず、たゞ黙つて苦痛を忍んでいなければならぬ。みんなは、病氣の小鳥が、たゞふくらんでじつとしている姿や、寄生虫に心臓を犯されたシニバードが、なんとなくいつもの元氣もなく、ゆううつに、鈍重にしている様子などを、よく知つておられるであろうが、黙つて忍んでいるものには、それに比例して、それだけ多くの注意を加え、その微細な動作や、ほとんどとらえがたい表情にまでも精通して、それ／＼の要求に、適度に応じてやる必要があるのではないであろうか。

私の信ずるところでは、動物の生態研究が、われ／＼の知識を豊富にするのと同じ程度に、動物を愛することは、つまり、われ／＼が秩序と道理を学んでいることにほかならないのだ。

(野鳥と共に)

学習の手引

- (1) りすの生長を月日順の一覽表にしてみる。
- (2) 動物を愛して飼育することの意味を考える。
- (3) 動植物の飼育や栽培をして、できるだけくわしく観察し、その記録を作つてみる。

十 末廣がり

狂言

大名「まかりいでたるは、隠れもない大名。太郎冠者あるか。

冠者「お前に。

大名「念なう早かつた。なんぢをよびいだすは別なることでない。明日は、いづれもを申し入れうと思ふが、何とあらうぞ。

冠者「まことに、内々は御意なうても申しあげうと存ずるところに、一段でござりませう。

大名「よからうな。

冠者「はあ。

大名「さうあれば、引出物には何をか出さうな。

冠者「されば、何がようござりませうぞ。

大名「いや、思ひつけた。下からは、上がはからはれぬものぢや。それがしは末廣がりを出さうと思ふが、何とあらうぞ。

冠者「ようござりませう。

大名「なんぢは大儀ながら、上方へのぼり、急いで求めて参れ。

冠者「かしこまつてござる。

大名「急げ。

冠者「はつ。さてもさて、それがしが頼うだる者は、立て板に水を流すやうに、ものをいひつけられます。まづ急いで参らう。

とかう申すうちに、都さうにござりまする。やれさて、失念のいたした。末廣屋を存ぜぬが、なんといなさうぞ。えい、ほしいものは呼ばはるていに見えてござる。それがしもこれから呼ばはりませうぞ。末廣買はう。

すり「まかりいでたるは、洛中にはまひする心も直にない者でござる。何者やら、どんどと申すほどに、さわたつてみませう。なうく、そなたは何をわつぱとおしやるぞ。

冠者「そのことでござる。るなか者でござれば、末廣屋を存ぜぬによつて、かやうに申すことでござる。すり「なう、そなたは末廣といふものをち見知りやつたか。

冠者「都人とも見えぬ。知つたればこれを買はうと言ふ。

すり「なうく、誤りました。それがしは末廣がり屋のていしゆでおりやるによつて、ねんごろに問うておりやる。

冠者「はて、仕合はせなことでござる。して、末廣のでき合ひはござるか。

すり「なかく、ござる。

冠者「急いで見せさつしやれ。

すり「心得てござる。それに待たつしやれ。

冠者「は。

すり「やれさて、賣らうとは申してござるが、何を賣りませうぞ。

思ひつけてござる。これにかさがござるほどに、これを持っていて賣りませう。

なうく、るなか人、それにござるか。これく。

冠者「や、はあ、これが末廣でござるか。

すり「なかく。

冠者「どれ、見せさつしやれ。

すり「これ、ごろんじやれ。

冠者「はゝ、まことに、廣げさつしやれたれば、はて、いかい末廣でござる。さりながら、頼うだ人

が注文のおこされてござるほどに、これに合うたらば買ひませう。

すり「さらば注文に合はせませう。

冠者「まづ『地紙よく』と申されてござる。

すり「これく、『地紙よく』とはこの紙のことでありやる。しはすぎつねのごとく、こんくといふほど張つてござる。

冠者「『骨みがき』。

すり「これく、『骨みがき』とはこの骨のこと、信濃しなのとくさをかけてみがいたによつてすべくいたす。

冠者「『かなめもと縫めて』は。

すり「『かなめもと縫めて』とは、かう廣げて、この金でもつてじつと縫めるによつて、こゝのこと

冠者「『絵はざれ絵』と申されてござる。

すり「ふん、これ／＼るなか人、これへ寄らつしやれい。やつとな。やつとな。

冠者「なう／＼、そなたはゐなか人ぢやと思うてちやうちやくめさるか。

すり「いや、ちやうちやくではぢやらぬ。こなたとそれがしとかうしてざれるをもつて、すなはち
ざれ絵といひまする。

冠者「さてもさても、注文に合うてうれしうござる。して、價はいかほどでござるぞ。
すり「高直にありや。

冠者「いくらほどでござるぞ。

すり「万疋**びき**でありやる。

冠者「これまた高いことでござる。ちつとねぎりませう。

すり「あう、少しなどはぬいてやりませう。

冠者「百ばかりになりますまい。

すり「なうそこな人、そのやうな下直**げぢき**な物ではない。ようお買ひやるまいぞ。

冠者「まうしまうし、なんと聞かつしやれたぞ。万疋の内をば、百ばかりもぬいてくだされまいかと
いふことでござる。

すり「はあ、聞き分けました。五百ぬいてしんじよ。

冠者「かたじけなうこそござれ。

すり「して、代物**だいもの**はどこで渡さつしやれまする。

冠者「三條のほてい屋で渡しませう。

すり「それで受け取りませう。

冠者「かたじけなうござる。さらばさらば。

すり「なう／＼。

冠者「なんでかござるぞ。

すり「そなたはさだめし主持しでござろ。

冠者「なか／＼。

すり「人の主はきげんのよいこともあり、またあしいこともある。もし自然とも、きげんのあしい時
は、ものとおしゃつたが、ようおぢやろ。

冠者「なんとでござる。

すり「『かさをさすならかすがやんま、これもかみのちかひとて、人がかさをさすなら、あれもかさ
をささうよ。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。』といふことぢや。

冠者「さてもさても、かたじけなうこそござれ。

すり「ようおりやつた。

冠者「やれさて、まづ頼うだ者に、急いでお目にかけう。殿さま、ござりまするか。

大名「太郎冠者、もどつたか。

冠者「歸りました。

大名「やれ、大儀や。急いで見せい。

冠者「はあ。

大名「こりや、なんぢや。

冠者「末廣でござりまする。

大名「これがや。

冠者「はあ、殿さまのひがつてんが参らぬこそ道理でござりますれ。かういたしますると、きつう廣がりまする。

大名「ふん、まことにこれはいかい末廣ぢやわいやい。して、あのれは注文に合はして來たか。

冠者「なかく、合はせましてござる。

大名「まづ『地紙よし』と。

冠者「はあ、それこそ念のつかひましたれ。この紙のことごとく、こんこんといふほど張つてござりまする。

大名「してまた、『骨みがき』は。

冠者「はつ、この骨のことでござる。信濃とくさをかけてみがいてござるによつて、すべくいたしまする。

大名「『かなめもと縫めて』は。

冠者「かう廣げまして、この金で縫めるをもつて、これが『かなめもと縫めて』といふところでござる。

大名「『絵はざれ絵』は。

冠者「それこそ念のつかひましたれ。それに待たつしやれませい。やつとな。やつとな。

大名「や、これは、何をしをるぞ。

冠者「いやまうし、この柄でかうしてざれるをもつて、ざれ絵と申しまする。

大名「やいそくなやつ。してちのれは知らぬが定か。

冠者「は、いや、存じませぬ。

大名「知らずばこれへ寄りをろ。末廣とは扇のこと。これはおのれ、ふるからかさを買うてうせをり、いや『末廣で候』の、『ざれ絵で候』のとそれがしが前へはかなふまい。しさりをろ。やれさて、憎いやつかな。

冠者「まことに頼うだ人の言はるれば、これはさしからかさぢやげなものを。ひよんなどをいたし

た。さりながら、都の者もみなまではぬきませなんだ。きげんなほしを教へてくれた。まづ急いで申してみませう。

はやし「いえい、かさをさすなら、かすがやんま、これもかみのちかひとて、人がかさをさすなら、あれもかさささうよ。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。いえい、かさをさすなら、かすがやんま、これもかみのちかひとて、人がかさをさすなら、あれもかさささうよ。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさうよの。

大名「はははは。いかにやいかにや、太郎冠者。買物にぬかれてはやし物をするとも、前代のくせもの、身が前へはかなふまい。

冠者「げにもさあり、やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさうよの。

大名「買物にはぬかれたが、まづこちへこげ入つて、うなぎのすしをば、えいやつとほゝばつて、ようか酒を飲めかし。

冠者「げにもさあり、やよ、げにもさうよの。

大名「何かのことはいるまい。人がかさをささうなら、あれにもかさを着せやれ。

冠者「げにもさあり、やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさうよの。

學習の手引

- (1) 話の筋をつかみ、場面に切ってみる。
- (2) 現代文に書きなおし、これを本文と比較してみる。
- (3) 狂言について研究する。
- (4) 「笑い」とはどんなものか、もつと調べる。

十一 涼み台

新星

毎年夏になつて、そろ／＼夕方の風がこいしいころになると、物置にしまつてある竹製の涼み台が中庭へ持ち出される。これが持ち出される日は、私の單調な一年じゅうの生活に、一つの著しいくざりをつける重要な日になつてゐる。もう、あしたあたりは涼み台を出そうじゃないかといふことが、だれかの口から言い出される。しかし、その翌日が雨であつたり、そうでなくともいろ／＼のことにもまぎれたりして、つい一日、二日と延びる。そのうちに、いよ／＼きょうはといふことになつて、朝のうちに物置の屋根裏から台が取りおろされ、一年じゅうのほこりやかびがねれぞうきんでていねいにぬぐい清められ、それから裏庭の日かけでかわかされる。そうして、いよ／＼夕方になつて中庭に持ち出されると、はじめて私の家にほんとうの夏が來たといふ心持になるのである。

涼み台のほかに、折りたゞみいすが三つ、同時に並べられて、一同が中庭へ集まる。まだ明かるいよいのうちには、なわとびをする者もあれば、写生帳を出しておばあさんのうしろ姿をかいてゐる者もある。明朝咲くあさがおのつぼみを数えて報告するものもある。幼い女兒ふたりは、縁側へいろ／＼なち花を並べて、花屋さんごっこをすることがある。暗くなると、花火をしたり、おとぎばなしをしたり、おばあさんに「お國の話」をさせたりしている。幼い子供らには、まだ見たことのない父母の郷國が、おとぎばなしの中の妖精の國のよう、不思議な想像に満たされているように思われるらしい。たとえば、郷里の家の前の流れにあひるがたくさん遊んでいて、夕方になると上流の方の飼い主が、小舟で連れに來るというような、なんでもない話でさえ、何かしら一種の夢のようなものを持つ頭の中に描かせると見える。それで、いつも「お國の話」をねだつては、おしまいに「私もお國へ行きたいなあ」と、ひとりが言うと、もうひとりが同じことばをくり返すのである。子供らの祖父の若かつたころの昔話もしば／＼出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出るのを聞いてみると、それがもう遠い／＼昔のできごとであつて、數年前まで生きていた私の父に

寺田寅彦

聞する話とは思われないような氣がする。まして、祖父を見たことのない、あるいはあはげにしか覚えていない子供らには、会津戦争や西南戦争時代の昔話は、書物で見る古い歴史の断片のようにしかひどかないであろう。そうしてそれだけに、かえって祖父に対するなつかしみは淨化され、純化されて、子供らの頭の中の神殿に納められるのであろうと思われる。

ことしの夏、涼み台が持ち出されてまもなく、長男が、よいのうちに南方の空に輝く大きな赤みがかつた星を見つけて、あれは何かと聞いた。見ると、それは黄道に近い所にあるし、ちら／＼また、さきをしないから、いずれ遊星には違いないと思った。そうして、近刊の天文の雑誌を調べてみると、それが火星だということがわかった。星座図を出して来てあたつてみると、それは処女宮の一等星スピカの少し東にあることがわかった。それで、その図の上に鉛筆で現在の位置をしるし、その後さきへ日づけを書いておいて、この夏じゅうのこの遊星の軌道を図の上で追跡してみようということにした。それが動機となつて、子供は空のよく晴れた晩には、時々星座図を出して、目だつた星宿を見比べていた。そのころは、まだ、織女や牽牛は、よいのうちにはかなり東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな木星が、屋根越しに、氷のような光を投げていた。

空をながめているうちに、時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星観測者が、夜じゅう空を見張つている話をして、それから新星の発見に関する話もして聞かせた。あもだつた星座を暗記していれば、しろうとでも新星を発見しうる機会はあるといふことも話した。

一秒間に二十九万九千キロを走る光が、一か年かゝつて達する距離を単位にして測られるような、ばくだいな距離を隔てて散布された天体の二つが、偶然接近して新星の発見となる機会は、たとえば积迦の引いた比喩の、めくらのかめが百年に一度大海から首を出して、あなたのあいた浮木にぶつかる機会にも比べられるほど少なそうであるが、天体の数のばくだいなために、新星の出現はそれほど珍しいものではない。たゞ光度の著しく強いのが割合にまれである。

こんな話よりも子供を喜ばせたのは、新星の光が數十百年の過去のものだということであった。我が家の大祖のだれかが、どこかでどうかしていたと同じ時刻に、遠い／＼宇宙の片すみに突発した事変の報知が、やっと今の世にこの世界に届くということである。

八月になつてから、雨天や曇天がしばらく続いて、涼み台も、片すみの戸袋に立てかけられたまゝに、幾日もたつた。

ある朝、新聞を見ていると、ことし卒業した理学士某氏が流星の観測中に白鳥星座に新星を発見したという記事が出ていた。その日の夕方、涼み台へ出て、子供とともにその新星をさがしたら、すぐわかつた。しばらく見なかつた間に季節が進んでいることは、織女・牽牛がよいのうちに真上に來ているのでも知られた。そうして、新星は、かなり天頂に近く、白鳥座のいちばん大きな二等星と光を争うほどに輝きまたゝいていたのであつた。

「しばらくなまけたので、新星の発見をしそくなつたね。」

と言つたら、子供はどう思つたか、顔をまづかにして、そして、さもあもしろそく笑つていた。私はじょうだんのつもりで言つたのだが、子供には私の意味がよくわかるまいと思った。それで、誤解をしないために、次のような説明をしておかなればならなかつた。

新星の出現する機会は、きわめて少ない。われくしろうとが星座の点検をする機会も、またはな

はだ少ない。したがつて、まず新星が現われて、それからわれ／＼がそれを発見するという確率は、二つの小さな分数の相乗積であるから、つまりごく小さい物のまた小さい分数にすぎない。これに反して、毎晩欠かさず空の見張りをしている専門家にとつては、「偶然」はむしろおもに星の出現ということのみにあつて、われ／＼の場合のように、星と人との関する二重の「偶然」ではない。しいて言えば、天氣の晴れ曇りや日常の支障といふような、偶然のできごとのために、一日早く見つけるかどうかといふことが問題になるだけであろう。

そのうちに、また曇天が続いて、朝晩はもう秋のこゝちがする。どうかすると、夜風は涼しそうる。涼み台もつい忘れらがちになつた。したがつて、星のことももう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の変化を研究すべき天文学者の仕事はこれから始まるので、学者たちは毎晩曇つた空をながめては、晴れまを待ち明かしていることであろう。

(冬彦集)

線香花火

夏の夜に、小庭の縁台で子供らのもとぶ線香花火には、ひとなの自分も強い誘惑を感じる。これによつて、自分の子供の時代の夢がよみがえつてくる。今はこの世にない親しかつた人々の記憶がよび返される。

はじめ先端に点火されて、たゞかすかにくすぐつてゐる間の沈黙が、これを見守る人々の心を、まさに來たるべき現象の期待によつて緊張させるにちょうど適當な時間だけ懸続する。次には火薬の燃焼が始まって、小さなほのぼがぼたんの花弁のように放出され、その反動で全体は振子のようによれ動く。同時に、しゃくねつした溶融塊のたまがだん／＼に成長していく。ほのぼがやんで、次の火花の段階に移るまでの短い休止期が、また名状しがたい心持を與えるものである。火のたまは、かすかな、物の煮えたぎるような音をたてながら、細かく振動している。それは、今にもほとばしり出ようとする勢力が、内部にうずまいていることを感じさせる。突然、火花の放出が始まると、目にもとまらぬ速度で発射される微細な火弾が、目に見えぬ空中の何物かに衝突してくだけでもするように、無数の光の矢束となつて放散する。その中の一片は、またさらにくだけて、第二の松葉、第三、第四の松葉を開する。この火花の時間的ならびに空間的の分布が、あれよりもつとまばらであつても、あるいは密であつてもいけないであろう。實に適當な歩調と配置で、しかもじゅうぶんな変化をもつて火花の音樂が進行する。この音樂の速度は、だん／＼速くなり、密度は増加し、同時に一つ／＼の火花は短くなり、火の矢の先端は力弱くたれ曲がる。もはや爆裂するだけの勢力のない火弾が、空氣の抵抗のためにその速度を失つて、重力のために拋物線^{はうぶつせん}を描いてたれ落ちるのである。私の母は、この最後の段階を「散り菊」と名づけていた。ほんとうに、單弁のきくのしおれかゝつたような形である。「ちりぎく、ちりぎく、ちりぎく。」こう言つてはやして聞かせた母の声を思い出すと、自分の故郷における幼時の追憶が、鮮明によび返されるのである。あらゆる火花の勢力をはき盡くしたたまは、もう力なくぼとりと落ちる。そうして、この火花の音樂の一曲が終るのである。あとに残されるものは、あわくはかない夏のよいやみである。

實際、この線香花火一本の燃え方には「序破急」があり、「起承轉結」があり、詩があり、音樂が

ある。ところが、近代になつてはやりだした電氣花火とかなんとか花火とか称するものはどうであろう。なるほど、アルミニウムだかマグネシウムだかの閃光は、光度にちいて大きく、ストロンチウムだかりチウムだかのほの色の色は美しいかもしないが、はじめからおしまいで、たゞぼうくと無作法に燃えるばかりで、拍子もなければ律動もない。それでは、あの燃え終りのきたなさ、曲のなさはどうであろう。

線香花火のしゃくねつしたたまの中から火花が飛び出し、それがまた、二段、三段に破裂するあの現象が、いかなる作用によるものであるかということは、興味ある物理学上ならびに化学上の問題であつて、もし、くわしくこれを研究すれば、その結果は、自然にこれらの科学の最も重要な基礎問題に触れて、その解釈はなんらかの有益な貢献となりうる見込みがかなりに多くあるだろうと考えられる。それで、私は十余年前から、多くの人にこれの研究を勧誘してきた。特に、じゅうぶんな研究設備を持たない人で、何かしら独創的な仕事がしてみたいというような人には、いつでもこの線香花火の問題を提供した。しかし、きょうまで、まだ、だれもこの仕事に着手したという報告に接しない。結局、自分の手もとでやるほかはないと思って、二年ばかり前に少しばかり手を着けはじめてみた。ほんの少しあってみただけで得られたわずかな結果でも、それははなはだ不思議なものである。少なくとも、これが、將來一つの重要な研究題目になりうるであろうということを認めさせるには、じゅうぶんであつた。

このおもしろく有益な問題が、從来、だれにも手を着けられずに放棄されている理由が、自分にはわかりかねる。おそらく、「文献中に見当たらない。」すなわちだれもまだ手を着けなかつたということ以外に、理由は見当たらないように思われる。しかし、人がかえりみなかつたということは、この問題のつまらないということには決してならない。

(続冬彦集)

學習の手引

- (1) 読後感を話しあう。
- (2) 觀察のすぐれている点を取り出してみる。
- (3) 次の間に答える。
 - イ 每年涼み台でどんなことをしていたか。
 - ロ ことしの夏はどんな話が出たか。
 - ハ 新星はいつ出現するか。
- ニ 線香花火の燃え方。
- (4) 寺田寅彦の隨筆をもつと読む。
- (5) 自分の周辺を振り返って、觀察したこととくわしく書いてみる。

付
作 錄
當 用 著 の 略 傳
漢 字 別 表

作者の略傳

宮沢賢治

明治二十九年（一八九六）岩手縣稗貫郡花卷町に生まれた。中学生のころから、植物標本の採集に熱中したり、短歌を作りたりしていた。盛岡高等農林学校在学中にも、農芸化学・地質学を研究するかたわら、文学・宗教・思想方面の読書を好み、また、創作をした。大正十年、花卷農學校の教師となつてからは、多くの短歌・詩・童話・脚本などを制作し、発表した。また、そのころ作曲もしている。大正十五年に退職して、その後は、農耕生活をしながら、故郷の人々と辛苦を共にして、農業・農村問題を研究し、熱心に実地指導に当たつた。その間、時々上京して、図書館に通つて勉強したり、映画・演劇の研究をしたりして、新しい農民の藝術を開拓したが、過労のあまり、ついに発病し、昭和八年（一九三三）三十八歳でなくなった。

「雨にもまけず」は、かれが昭和六年、病床にあって鉛筆で手帳に書き残した詩で、これによつてかれのひとがらを知ることができる。

かれの著作は多方面にわたつて非常に多く、詩集「春と修羅」、童話「風の又三郎」「どんぐりと山猫」「グスコードリの傳記」「銀河鉄道の夜」、脚本「植物医師」、評論「農民藝術論」などは、特に有名である。これらは、「宮沢賢治全集」にまとめられている。

西尾 実

明治二十二年（一八八九）長野縣に生まれた。東京大学國文学科に学んだ國文学者で、國語教育に盡力している人である。現在、東京女子大學^{武三國語研究室}教授である。著書には、「國語國文の教育」「國語教育の新領域」「言語とその文化」などがある。

山村暮鳥

本名は土田八九十。明治十七年（一八八四）群馬縣群馬郡境が岡村に生まれた。十六歳のころ郷里で洗礼をうけ、のち東京の神學校を出て宣教師となつた。明治三十九年ごろ、相馬御風らの雑誌「百合」に寄稿し、歌人となろうとしたが、四十三年に、人見東明・福士幸次郎らの自由詩社に加わつてからは、短歌から詩にうつり、「航海の前夜」を発表した。それ以来、山村暮鳥と号を改め、室生犀星・萩原朔太郎らの人魚詩社に加わつて、當時新しい詩風といわれた象徴的な傾向をとり、詩集「三人の処女」「聖三棱玻璃」を出版した。その後、宗教的情操を加え、大正七年、詩集「風は草木にささやいた」を出して、やさしいことばで、人道主義・民主主義の自由詩を制作した。さらに、詩集「雲」において、東洋風の靜寂透明な詩を作り、大正詩壇に重きをなした。大正十三年（一九二四）茨城縣磯浜町海岸大洗で療養中、四十一歳でなくなった。前記詩集のほかに、これらから詩を集めた「暮鳥詩集」がある。なお、童詩や童話集もある。

フアーブル

フランスの昆虫学者で、一八二三年、アヴェーロン縣サンリレオンに生まれた。苦学しながら、アヴィニヨンの師範学校を卒業し、満十九歳で小学校の教師となつた。さらに、独学で数学・物理学を学び、学士の称号を得、アヴィニヨンの高等学校の教師となつた。一八五四年、昆虫学者の長老であるレオン・ル・デュフルの著書を読んで感激し、貧しい生活とたゞかいながら、その長い生涯^{生業}を昆虫の研究に費やし、昆虫の本能と習性との観察によって、自然の秩序を見いだしたのである。一九一三年、時の大統領ボアンカレーは、國民を代表して、かれの勞をねぎらつた。一九一五年、九十三歳でなくなつた。

「昆虫記」は、一八七八年に第一巻を、一九一〇年に第十巻を出して完結した。文章が流麗で、文學的價値も高く、各國語に翻訳され、わが國でも廣く愛読されている。この課の文章は「昆虫記」(山田吉彦訳)の第二分冊第九章「戻り道」によつたものである。

訳者、山田吉彦は、明治二十九年(一八九六)鹿児島縣に生まれた。東京開成中学校を卒業して後、フランスに留学した人である。ほかに社会学に關する翻訳書が多い。

宇田道隆

明治三十八年(一九〇五)高知縣に生まれた。中学生のころ、寺田寅彦の講演を聞いて心を打た

れ、東京大学物理學科に入學し、同氏について勉強した。氣象や海流の觀測に興味を持ち、潮目の研究で理學博士の学位を得、現在は、長崎海洋氣象台長である。著書には、「海と魚」「海」「海の探求史」「寅彦先生閑話」などがある。

荻原井泉水

本名は藤吉。明治十七年(一八八四)東京に生まれた。四十一年、東京大學言語學科を卒業した。早くから俳句に興味を持つて作つていて、新傾向の俳句運動が盛んになつたころ、四十四年、俳誌「層雲」を創刊して、自由律の俳句を創作し、表現形式の上で俳句に新しい境地を開いて現在にいたつてゐる。また諸國を遍路・巡礼したり、芭蕉の「奥の細道」を慕つて、奥羽地方を旅行したりして、「山水巡礼」「觀音巡礼」「旅人芭蕉」などを書いた。なお、ほかに、句集・俳話・評論などがある。

中西悟堂

明治二十八年(一八九五)石川縣に生まれた。佛教の學校を出て後、住職をしたり、新聞記者をしたりしたが、やがて詩作に志すようになった。また、わが國の野鳥の研究にも興味をもち、昭和九年日ノ野鳥の会を創設して、雑誌「野鳥」を出し、以來、野鳥の知識普及と保護にこめてゐる。鳥類・昆虫に関する論文・隨筆が多く、「野鳥と共に」「野鳥ガイド」「昆虫読本」「野鳥の中に」など

がある。その他、詩集「叢林の歌」をはじめ、詩や歌に関する著述がある。

寺田寅彦

筆名は吉村冬彦。明治十一年（一八七八）東京麹町に生まれた。両親に従つて故郷高知に帰り、中学校時代を過ごした。明治三十六年、東京大学物理学科を卒業し、その後、理学博士の学位を得、ドイツ・イギリスなどに留学した。帰國して、東京大学の教授となつたが、昭和十年（一九三五）五十八歳でなくなった。かれは物理学界のために大いにつくすところがあつたが、また、第五高等学校で教えを受けた夏目漱石の影響で、ホトュギス派の写生文をよくし、隨筆を書いて、文學者としても有名である。その隨筆は、科學者としての体験や見方から、ものごとをくわしく鋭く觀察推理して、それを文學的に表現したもので、獨得の新鮮な味わいを持っている。

隨筆には「冬彦集」「続冬彦集」「薺柑子集」「蒸発皿」「万華鏡」「触媒」などがあり、これらは「寺田寅彦全集」にまとめられている。

当用漢字別表

（この表の漢字は、当用漢字表の中で、義務教育の期間に、読み書きとともにできるよう指導することが必要であると認めたものである。）

口 入 兒	人 入 二 丁 乙 ノ 、 一 一	中 主 久 乘	一 丁 七 三 上 下 不 世	刀 口 ヌ	冬 冷
再	交 京	事 二 五	冬 冷	出	刀 分 切 刊 列 初 判 別 利 制 刷 券 則 前 副
元 兄 先 光 兄	人 仁 今 仕 他 付 代 令 以 件 任 休 似 位 低	倉 個 倍 候 借 仮 (假) 停 健 側 備 傳 働 價 優	創 力 功 加 助 努 効 勇 勉 動 務 勝 勞 (勞) 勢 勤	勸 勸	化 北
入 內 全 両 (兩)	住 何 佛 作 使 來 例 供 便 係 保 信 俗 修 俵	印 厚 原	包 十 千 午 半 爽 南 博	印	区 (區)
八 公 六 共 兵 具 典 兼	倉 個 倍 候 借 仮 (假) 停 健 側 備 傳 働 價 優	去 参 (參)	又	ム ム ム ム ム ム	口 口 口 口 口 口

口士夕大士尤山工巾己干少富寺守就局山川市平

回(園)園(圓)園(圖)園
在地坂均型基堂報場境墓增庄(壓)
士壹(壹)
夏夕外多夜
天太夫央失奮
女妹妻姊始委婦
子字存孝季孫學學
守安完宗官定客宣室宮害家容宿寄
富寒察矣(實)寫(寫)
寺專尊對(對)導
就局居屆(屆)屋展屬(屬)
山岩岸島
川州
市布希師席帳帶常
平年幸幹

支戈戶支心意形引弟弱張強
役往待律後徒得從復德
心必志忠快念恩急性恩息悲情惡想
意愛感態價憲應成我戰
戶所手才打承技投折招拜拾持指授探接
支改放政敵數救敗散敬敵數(數)整
推提損拳(舉)括(擴)
料新斷(斷)
方旅族旗
日早明易星春昨昭是時晝景晴暑暗
收文

日月木水火水氣氏毛比母叟死止欠
曲書最會(會)
月有服望朝期
木未末本材村東板林果查柱校株根
格案條械森植業極榮(榮)構樂標樣橋
機橫檢權(權)
次欲歌歎(歎)
止正步武歷歸(歸)
死殘(殘)

片牛玄犬玉王現球理
生用牛牧物特
版率犬犯狀獨(獨)
田由申男町界畠留略番画(畫)異當(當)
疑病登發(發)
牛用
皮率
目直相省真眼
益盟
知短
石破研(研)確
究空
私秋科秒移稅程種稱(稱)穀積
示社祖祝神票祭禁福禮(禮)

立	章	童	競
竹	第	筆	等
米	粉	精	答
糸	紀	約	策
絹	納	純	算
經	紙	紙	管
綠	級	級	節
綿	素	細	築
線	終	終	
練	組	組	
縣	結	絕	
總	給	給	
績	統	統	
織			

良	色	艸	虫	虎	丘	行	衣	血	見	角	言
花	芽	苦	英	茶	草	荷	菜	万	(萬)	落	葉
藥											著
處	(處)	號									藏
蟲	蚕	(蠶)									藝
血	衆										
衆											
行	術	衛									
衣	表	補	製								
表											
補											
製											
複											

赤	走	足	身	車	辛	辰	走	足	身	車	阜	佳	雨	青
走	足	足	身	車	辛	辰	走	足	身	車	阜	佳	雨	青
足	足	足	身	車	辛	辰	走	足	身	車	阜	佳	雨	青
足	足	足	身	車	辛	辰	走	足	身	車	阜	佳	雨	青
足	足	足	身	車	辛	辰	走	足	身	車	阜	佳	雨	青

非	面	革	音	頁	飛	食	首	馬	骨	高	魚	鳥	齒	黃	黑	鼻	麥	齒	黃	黑	鼻	齒	黃	黑	鼻	齒	幽	齒
非	面	革	音	頁	飛	食	首	馬	骨	高	魚	鳥	齒	黃	黑	鼻	麥	齒	黃	黑	鼻	齒	黃	黑	鼻	齒	幽	齒
非	面	革	音	頁	飛	食	首	馬	骨	高	魚	鳥	齒	黃	黑	鼻	麥	齒	黃	黑	鼻	齒	黃	黑	鼻	齒	幽	齒
非	面	革	音	頁	飛	食	首	馬	骨	高	魚	鳥	齒	黃	黑	鼻	麥	齒	黃	黑	鼻	齒	黃	黑	鼻	齒	幽	齒
非	面	革	音	頁	飛	食	首	馬	骨	高	魚	鳥	齒	黃	黑	鼻	麥	齒	黃	黑	鼻	齒	黃	黑	鼻	齒	幽	齒

中等國語

(1)

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Jan. 13, 1949)

昭和二十四年一月十三日印 刷 同日識刻印刷
昭和二十四年一月十七日發行 同日識刻發行 定價十五円
〔昭和二十四年一月十七日 文部省検査済〕

著作権所有者 文 部 省

発行者

発行者

東京都千代田区神田岩本町三番地
中等学校教科書株式会社
代表者 阿部眞之助

東京都北区稻付町一丁目二〇八番地
二葉印刷株式会社
代表者 大野治輔

発行所

東京都千代田区神田岩本町三番地
中等学校教科書株式会社



広島大学図書

0130449675

